

左：「猫 (a)」(約 12 × 28 × 高さ 17cm、樟・ラブラドライト・彩色) / 右：「鹿 (b)」(約 17 × 27 × 高さ 25cm、樟・水晶・彩色) / 奥：「鹿 (a)」(約 15 × 24 × 高さ 43cm、樟・水晶・彩色)

「何かの化身のような動物の姿や表情を想像しながら、制作していました」

つちや・よしまさ 1977年、神奈川県出身。彫刻家。東京藝術大学美術学部彫刻科卒業後、同大学院美術研究科文化財保存学専攻にて仏教美術の古典技法と修復を学ぶ。2007年に同専攻博士課程修了。

Information

高島屋美術部創設110年記念
土屋仁応展
「水晶と鹿」

日本橋店 6階
7月26日(水) → 8月1日(火)
大阪店 6階
9月20日(水) → 26日(火)
京都店 6階
10月4日(水) → 10日(火)
横浜店 7階
10月18日(水) → 24日(火)
新宿店 10階
11月1日(水) → 7日(火)
ジェイアール名古屋タカシマヤ 10階
11月15日(水) → 21日(火)
上記各店美術画廊
※最終日は午後4時閉場



Artist
Clip



土屋仁応
Yoshimasa Tsuchiya

人間が投影された動物像を彫り続ける

photo: Yasukuni Iida
text: Yurie Kimura

小

小さな工場を改造した自宅兼アトリエに引っ越してきたのは3年前。庭では60種類以上のバラを栽培中だ。

「バラが好きなのは品種改良の究極のような気がするから。そこに人間ってなんだろう？」というひとつの答えを見る気がして。僕も作品と作品を掛け合わせて新しい作品を作っているので共通するものを感じます」

「彫刻家」を意識したのは「そんなに立体工作が好きなら彫刻家になれば？」と周囲の人に言われた幼稚園の頃。東京藝術大学美術学部彫刻科の実習で「これしかない」と思ったのが木彫だった。その後、高山寺の「神鹿」を見て影響を受ける。

「衝撃的だったのはあまり写実的じゃなかったこと。『形』ではなく『正体』や『本質』を形にしていると感じて、自分もイメージを優先させた動物像を作ろうと思いました」

以来、動物や幻獣を水晶の玉眼を入れて作り続けてきた。10年前に同大学院文化財保存学の博士課程を修了し、以後、彫刻家として活躍の場を確実に広げている。10年はあつという間だったと振り返った。

今回の展覧会「水晶と鹿」のテーマは「原点回帰」。鹿、犬、猫などこれまでも繰り返し作られてきた動物像の新作が登場する。どれも仏像に通じる印象で、何かを語り出しそうな雰囲気だ。

「動物それぞれに人間が投影しているイメージがあつて、それは時に人智を超えた崇高なものだったりする。そういう、何かの生まれ変わりや化身のような動物の姿や表情を想像しながら、今回も制作していました」

土屋さんの表情にはどこか初々しさが残る。これから、を担う人だと実感させられる。

「やってみたいこと、作ってみたいものはたくさんあります。どんなビジョンを描くか、がこれから問われてくる気がします。何が自分にとって必要で、みんなにとっても意味のあるものか、もつと考えていきたいですね」